Vol. 112, No. 4　May 2015　　題字　故 一萬田 尚登氏

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化交流に貢献して 112 年）

〈パドマ・ブーシャン勲章授章式〉
三角顧問(左)に敬意を表するムカジー大統領(右)

於 インド大統領官邸
写真提供；鹿子木謙吉理事

目次

1. 白寿の三角佐一郎顧問 パドマ・ブーシャン勲章受賞の為訪印 …… P. 3
2. 菩提僊那像 …… P. 6
3. インドに暮らして …… P. 8
4. インドニュース(2015 年 4 月) …… P. 10
5. イベント紹介 …… P. 13
6. 新刊書紹介 …… P. 14
7. 掲示板 …… P. 15

1. 白寿の三角佐一郎顧問 パドマ･ブーシャン勲章受賞の為訪印
The Padma Bhushan Award

〈受賞後の
三角佐一郎顧問〉

公益財団法人日印協会 理事
鹿子木 謙吉

日印協会三角顧問は、1937 年(昭和 12 年)、当時の日印協会の副島八十六専務理事に会ったことを契機に、翌 1938 年 3 月から日印協会で働き始めました。戦前･戦中･戦後を通じて日印協会に関わり、特に戦後の厳しい時期に、協会の再建に取り組まれました。

大隈信常第四代会頭、一萬田尚登第五代会長、櫻内義雄第六代会長、森喜朗第七代会長のもとで日印協会を支えながら活動を続け、2006 年、専務理事から顧問になりました。

昨年 2014 年 5 月 20 日、インド大使館文化センター講堂にて「三角佐一郎氏の白寿を祝う会」があり、三角顧問は、多くの日印交流関係者から祝意を受けられました。

更に、此度三角顧問の 70 年に及ぶ日印友好のためにご尽力された事に対し、インドの大統領からパドマ･ブーシャン勲章を受けることになりました。

最初に受賞の知らせを聞いたのは、インド大使館主催の共和国記念日の席でした。顧問は、ずっと陰で支えてきた立場なので、これまでの事が評価されたと嬉しく思い、驚きと喜びが交差されたご様子でした。最初は、渡印の事までは考えていなかったようですが、何かにつけインドの事を考え、とにかくインドの事が好きで､「折角のチャンスだから」と養女の洋子さんと話合い､行くことに決めたそうです。

飛行機に乗るにあたって、気圧の変化に耐えられるか、心臓は大丈夫か、透析はどうしようか等々心配し､医師に相談し､ひとつひとつ問題をクリアしながら準備を進めていかれました。万が一の時には、「ガンジス河に流す」とまで覚悟を決めての渡印です。

3 月 29 日、洋子さん、小生(鹿子木謙吉、日印協会理事)を伴い、エア･インディアでデリーに向かいました。下記はその報告書です。

一行はインド大使館、エア･インディアの特別なご配慮とご支援により無事 29 日夕刻デリーに到着、インド内務省の儀典官に出迎えられ､インド政府により用意されたアショカ･ホテルに入り､安堵の気持になりました。

3 月 30 日(授賞式典の日)午前 10 時インド内務省儀典官、インド外務省からデリー滞在中三角顧問のお世話をするよう特別の委嘱を受けたアショック･チャウラ氏､透析担当医のマハパトラ氏らがアショカ･ホテルに車椅子を持って三角顧問を出迎え、内務省の車が先導し、Dr. Ram Manohar Lohia 病院の大型救急車がこれに続く形でホテルを出発しました。午前 11 時過ぎインド大統領官邸に入り､一同はパドマ各賞の授賞式典会場に着席、ムカジー大統領、モディ首相はじめ政府高官の入場を待ちました。特にデリーでこれまで親しくしていたチャウラ氏と上記病院透析担当医のマハパトラ氏が一緒に大統領官邸に招かれ、式典の間中三角顧問に付き添って下さった事は、私達同伴者にとって非常に心強く、式典会場でもリラックス出来て、感謝の気持ちで一杯になりました。

〈三角顧問の胸に勲章をつけるムカジー大統領〉

午前11時半の定刻より少し遅れて大統領が着

席、軍楽隊のインド国歌の演奏が厳かに始まり、式典が開始されました。内務省高官の司会の言葉に続いて、インド国民最高栄誉賞バーラット・ラトナ、続いてパドマ(蓮の花、インド国花)各賞がパドマ・ヴィブシャン、パドマ・ブーシャン、パドマ・シュリの順に、出席者のみ名前が読上げられました。三角顧問はパドマ・ブーシャン賞の受賞者の最後に名前が呼ばれ、プラナブ・ムカジー大統領が壇上から降りて車椅子に座っている三角顧問の元に近づくと、顧問の胸元に勲章をつけ、賞状を手渡して、顧問に向かい両手を合わされました。(表紙をご参照下さい)

顧問は、授賞式の時の事はあまり口にされませんが、いろいろなお気持ちがあるようで、やはり、最大の喜びであり幸せな事であったことは、その様子から窺い知ることが出来ました。

続いてパドマ・シュリ賞の授与があり、著名な科学者や医師も次々に登壇し、40 分後には式典が終了しました。

列席者、受賞者、政府関係者一同、別の広間でのレセプション会場に移動、インドのスナックやケーキとフルーツ、珈琲と紅茶、ソフト・ドリンクが並べられたテーブルから思い思いの食べ物、飲物を手に受賞者と同伴者が喜びの言葉を交わしていました。

その間を縫うようにして大統領、首相が主な受賞者に言葉をかけ、握手を交わして広間を一巡し別室に入って行かれました。人々は大統領、首相を見送り、軽食を済ますと、三々五々大統領官邸を後にしました。小生は八木毅大使のお姿を見つけ、三角顧問、洋子さんを紹介し、「小生は明日午前 11 時半貴館に佐藤仁美参事官を訪れ、訪印のご挨拶と三角氏の健康状況及びデリーでの日程などをお伝えすることになっています」と、申し上げました。

八木大使は、昨年白寿を祝われた三角顧問が訪印され、パドマ・ブーシャン勲章を受賞されたことを大変喜ばれ、更に、長旅の翌日に授賞式に臨まれた三角顧問の健康状態を大変心配されておられました。その後、私達は大統領官邸に待機していた大型救急車とチャウラ氏の車に分乗し、三角顧問の透析に立ち会う為、大統領官邸からインド内務省に指定された Dr. Ram Manohar Lohia 病院へ急ぎました。

病院で待ち受けていたのは若い医師 2 人、数人の看護師、それに A.S. Films 社のテレビ取材班 3 名でした。「テレビ取材は、お疲れの三角さんには少し酷ではないか」と、チャウラ氏と透析担当医のマハパトラ氏に伝えましたが、「首相直々に委嘱されて取材に来た政府関連のプロジェクトなので、断れない」と言うので、透析を受ける前、3～40 分ほど三角顧問のこれまで 70 年間日印友好の為尽力されてきたこと、今度の受賞の感想など、チャウラ氏の通訳でインタヴューを受けました。

透析の間、三角顧問は最初不安そうで、何度も枕元に座っている洋子さんの名前を呼んでいましたが、看護師が優しく接してくれ、授賞式の疲れも出て、後半は少しうとうと眠られている様子でした。終了後、小生と洋子さん、チャウラ氏が院長室に Dr. Prof. A.K. ガドパイレ 氏を訪ね、「三角顧問が今週月・水・金 3 回の透析を受けることになりましたが宜しくお願いします」と、ご挨拶致しました。彼は Ministry of Health &Family Welfare (インド政府の健康、家族・福利厚生省)に所属して、上記病院の経営を任されているとの事でした。

〈三角顧問を見守るガドパイレ院長(右)〉

翌 4 月 1 日午前 11 時半頃、マハパトラ氏含め 6 名が病院の車とチャウラ氏の車 2 台に分乗して日本大使館に向かい、館内の大使公邸で八木大使、晶子夫人、菊田豊次席公使、佐藤仁美参事官の出迎えを受けました。当日参加予定のグジャラト印日協会会長ムケシュ・パテル氏から直前「欠席」との電話が入りました。パテル氏とは旧交を温めようと思っていたので、残念な気持ちになりました。

応接間で日本茶を頂き、歓談していますと、元駐日インド大使アルジュン・アスラニ氏がお出でになり、三角顧問とは約 20 年ぶりの再会となりました。アスラニ氏から此度の叙勲に対し祝意が述べられ、三角顧問も大変喜ばれました。昼食会は和食を中心にしたメニューで、元気な声のアスラニ氏が会話を独占

する形で進行し、三角顧問は少しお疲れになったのか、黙って皆さんの会話を聞いておられました。終始和やかな雰囲気の中、昼食会が終わり、出席者一同主宰して下さった大使ご夫妻に感謝の気持ちをお伝えし、公邸を後にしてそのまま Dr. Ram Manohar Lohia 病院へ直行し、三角顧問は 2 度目の透析を受けられました。透析終了後、私達は近くの Fujiya 中華料理店に行き、三角顧問の食欲は相変わらず旺盛で、皆を安心させました。

4 月 3 日(金)Good Friday(クリスチャンの祝祭日)、病院は透析部門を除きお休みです。小生はチェックアウトや帰国の準備を整え、9 時前に迎えに来た病院の若い医師と看護師と共に全員で病院へ行き、三角顧問は 3 度目の透析を受けられました。病院のスタッフの皆様のご尽力で、無事透析が終わろうとしている時、主任担当医のマハパトラ氏が来て、無事終了した事を告げ、「三角さん、よく頑張ったね」と、言ってくれました。洋子さんは三角顧問に「先生や看護師さん達のお蔭よ。有難うと言って下さい」と顧問を促しましたが、本人は黙って頭を下げ、感極まったのか声が出ませんでした。洋子さんは「お父さん、良かったね、良かったね」と何度も繰り返しました。

ホテルに戻り、5 時半過ぎに内務省の役人が数名ホテルに迎えに来てくれました。Dr. Ram Manohar Lohia 病院院長も、若い医師達や看護師達大勢を伴ってホテルにやってきました。大勢の人達に見送られホテルを出て、空港玄関でマハパトラ氏、チャウラ氏にも別れを告げました。内務省儀典官に付き添われエア・インディアのカウンターに行きチェックインし、出国手続きを済ませ、VIP ラウンジで厚生省医務官数名に見守られて、約 1 時間呼出しのアナウンスを待ちました。離陸 30 分前ラウンジを出て三角顧問は車椅子で、洋子さんと小生は特別仕立てのカートで搭乗口に向かい、搭乗口で儀典官に感謝の言葉を述べ、8 時 40 分機上の人となり、機はデリーを離れました。

無事に成田に降り立った時には、顧問と洋子さんのお二人は安堵の表情を見せながら、「ガンジス河に流れそびれた」と、笑っていました。

帰国後、体調に問題も無く落ち着かれた顧問と洋子さんは、「今回の渡印は、様々な方のご厚意やご支援に助けられて実現しました。準備段階や、インド滞在中も、皆様に本当に良くして頂きました。ありがとうございます」と、感慨深げに何度も仰っていました。

後日、八木大使の三角顧問に関するメッセージがデリーの日本大使館のホームページに寄せられました。こちらも、是非ご一読下さい。

日本大使館のホームページURL　ttp://www.in.emb-japan.go.jp/About_Us/Ambassador_Message_j.html

2015 年 4 月 24 日

2. 菩提僊那像
The Statue of Bodhisena

菩提僊那像製作に寄せて

学習院大学兼任講師・金剛院仏教文化研究所主任研究員
（仏教文献資料学）小島 裕子

印度と日本の繋がりは、かの国に誕生した仏教がわが国に伝来したことに始まります。そして、その伝来からおよそ二百年を経た奈良時代、天平八年(736)に一人の天竺国(印度)の僧が第九次遣唐使船で来日しました。婆羅門僧正とも、また菩提僧正とも称され、人々から敬われた菩提僊那(ボーディ・セーナ Bodhisena)です。

この印度の僧侶である菩提僊那の名を広く知らしめたのは、天平勝宝四年(752)、聖武帝の誓願により、東大寺に盧舎那仏(大仏)が造立され、その開眼供養が営まれた時、僧正が像内に魂を請じ入れるための儀式で開眼の筆を執ったことによります。それは仏教を興した釈尊誕生の地から遥々来日された僧による開眼として、大きな意義を持つものでした。僧正が握った大仏開眼の筆には、およそ 200m におよぶ縹色の縷(る)が結ばれ、多くの人々がこれに結縁し、そのゆかりの品々は今も正倉院宝物として大切に伝えられています。

お釈迦様の誕生の地であり、仏教発祥の国から訪れた僧侶が我が国の大仏の開眼を行ったことは、東アジアの仏教文化圏において、極めて歴史的な意義をもつ出来事でした。爾来、東大寺では天平の草創に関わった、本願聖武上皇(観世音菩薩の化身)、開山良弁僧正(弥勒菩薩の化身)、勧進聖行基上人(文殊菩薩の化身)、そして開眼師菩提僊那(普賢菩薩の化身)という四聖の一人として、かの僧正の御影を掲げています。

その御影は早く『先徳図像』(平安時代 12 世紀、旧高山寺蔵、現東京国立博物館蔵)や『三国祖師影』(鎌倉時代 14 世紀、醍醐寺蔵)といった白描図像に認められますが、聖武天皇五百年遠忌にあたる建長九年(1257)に四聖講会の本尊として製作された東大寺蔵『四聖御影』(建長本/鎌倉時代、絹本著色、重要文化財、旧四聖坊什物、現東大寺蔵)の彩色画に結実しています。そして、さらに南北朝時代の永和三年(1377)に建長本を模写した(永和本/南北朝時代、絹本著色、重要文化財、旧眉間寺什物、現東大寺蔵)が製作されました。この永和本を元にわが国では近代に至り、様々な節目に菩提僊那像の製作が行われ、現在三体の尊像が僧正ゆかりの東大寺、霊山寺、大安寺の南都(奈良)の三寺に安置されています。

来日した僧正が難波の浦から奈良の都へ至る道すがらの富雄で、聖地霊鷲山に似ていることを喜び、後にその菩提が弔われた地とされる霊山寺の尊像(善本秀作氏製作、楠木彫一木彫り白木地仕上げ)は、昭和六十年(1985)に東山光師貫主により開眼されました。また、東大寺の尊像(上原美千代氏製作、木彫、篠崎悠美子氏彩色)は、大仏開眼千二百五十年慶讃法要に臨んで平成十四年(2002)に橋本聖圓別当により大仏殿の広庭で開眼されました。近くは、僧正が止住していた大安寺において、千二百五十年の御遠忌と平城遷都千三百年とが重なる平成二十二年(2010)にその御影(宮本道夫氏製作、彩色、軸装)が河野良文貫主によって開眼されました。

菩提僊那については、これまでわが国においては『東大寺縁起絵詞』や『大仏縁起絵巻』をはじめとする多くの説話などの伝承世界が語り継ぎ、また上記の僧正像や御影の製作をもって温められてきたという歴史的経緯があります。そうしたなかで、このたびのインド大使館協力による菩提僊那像の製作は、平成24年(2012)、日印の国交樹立 60 周年を迎え、また翌年が日印協会創立 110 周年でもあったという節目に、東大寺で菩提僊那継承事業を公式催事として行ない、その後も毎年開催する中、日印両国側からインド人の顔をした尊像製

作の機運が芽生え、高まったことによります。

インド、デリーにある 3D 像の専門、ASTRO LINKS による製作にあたっては、イメージ作りの参考として、『四聖御影』をもとに、『先徳図像』や『三国祖師影』、加えて東寺に所蔵される『真言七祖像』の「龍猛像」(弘仁十二年(821)平安時代、絹本著色、空海製作企図)など、また老いを加える意味で「俊乗房重源上人座像」(鎌倉時代、木彫)を日本側から提示しました。

折しも、インド政府が日本で開催中の『インド祭 2014－2015』の主要催事、東京国立博物館特別展『コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏 仏教美術の源流』というインドの仏教美術が紹介される時節、日印交流の賜物として造像された菩提僊那像に多くの方々が出遇われることを通し、僧正来日の歴史的な意義が知られるとともに、本像が、未来へ向け、仏教はもとより、広く日印両国の様々な分野における交流の懸け橋となりますことを、ここに心より願っております。

---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---***---

菩提僊那座像が制作された

NPO 法人日印交流を盛り上げる会 理事長
（ミティラー美術館館長）長谷川 時夫

菩提僊那は、751 年(天平勝宝 3 年)僧正に任じられ、翌年 752 年(4 月 9 日)に東大寺盧舎那仏像の開眼供養会の導師をつとめた。日印国交樹立 60 周年の年にインド政府が 1276 年の時を経て菩提僊那を継承する事業を東大寺で 2 回、5 月と 8 月に行った。4 年目となる今年は The Festival of India インド祭の一環として、5 月 18 日菩提僊那が太宰府に到着した日に第 4 回菩提僊那継承事業 2015 を開催する。

〈2014 年5 月18 日 東大寺中門にて→

継承事業を継続する中で(両国の教科書に載るまで続けたいと思っている)、様々な人が東大寺まで馳せ参じてくださり、協力していただく中で、菩提僊那像がインド人の顔を見ないで描かれたと思われる四聖御影の菩提僊那から引用されていることを知ることとなり、「インド人の顔をした菩提僊那像があるといいね」という話が誰ともなく起きてきた。ワドワ・インド大使に相談すると、賛成してくださった。

今回インド祭の主要催事の一つ、特別展「コルカタ・インド博物館所蔵 インドの仏展 仏教美術の源流(東京国立博物館、3/17～5/17)」で日印交流史上初めて本格的なインドの仏教美術が紹介されることでもあり、東大寺の執事長の平岡昇修氏、東方学院長の前田専學氏、仏教美術史学者の平岡三保子氏、小島裕子氏、写真家の松本榮一氏の協力を得ながら、座像を作ることになった。ラムー文化担当参事官の協力により、ナーランダの Nava Nalanda Mahavihara 副学長の紹介でデリーにある仏像専門の会社で制作することになった。

インドの力でインドの顔をした菩提僊那像ができあがり、4 月、日本に無事到着した。

2 年前の 12 月 2 日、インドご訪問の天皇皇后両陛下のインド大統領主催歓迎晩餐会で、天皇陛下は次のように述べられた。

「貴国と我が国とは地理的に離れ、古い時代には両国の間で人々の交流はほとんどなかったように考えられます。しかし、貴国で成立した仏教は 6 世紀には朝鮮半島の百済から我が国に伝えられ、8 世紀には奈良の都には幾つもの寺院が建立され、仏教に対する信仰は盛んになりました。8 世紀には、はるばるインドから日本を訪れた僧菩提僊那が、孝謙天皇、聖武上皇、光明皇太后の見守る中で、奈良の大仏の開眼供養に開眼導師を務めたことが知られています。この時に大仏のお目を入れるために使われた筆は今なお正倉院の宝物の中に伝えられています」(宮内庁ホームページより転載)

1m の菩提僊那の座像は、東大寺での菩提僊那継承事業の後、堺市やインド大使館、ナマステ・インディアの会場にも登場していただきたいと思っている。また、毎年東大寺で 5 月 18 日に菩提僊那の継承事業をしていきたいと思っていますので、多くの方々にご参加していただけたら幸いです。

3. インドに暮して
Life in India for 20 years

公益財団法人日印協会会員　渡会 法子

私はインドから帰国し、日本人? になるべく? 只今、リハビリ中です。デリーでの暮らしは約 20 年におよびました。

インドを題材とした本を日本で読むと、私はこんな国に暮らしていたのか!?と、時に、それを現実離れした、見知らぬ国のことのように感じることがあります。

作家の力量に感嘆する一方で、長くインドに暮らしながら、事々を見ずして、感じずにして、且つ、インドへのきちんとした知識もない己に突き当たります。

そんな私が、単に長く暮らしてきた、と言うだけで、インドについて書くのは、大変おこがましいことです。が、今回「日印協会」に機会を与えて頂きましたのに甘えて、私の印象に残っていることを以下にお話させて頂こうと思います。

事は･･･親が決めた結婚の相手がどうしても嫌で、その結婚から逃れるため、村から出て働こう、と彼女が考えた事から始まりました。この時点で、彼女の結婚式は約 4 ヶ月後。それまでに、と、彼女は働き口を探し始めました。この辺りの村から遠くの都会に働きに行っている人達に「携帯電話」で相談。彼女の状況に同情したそのうちの一人が、就職先を見つけてくれました。

その人は、村から出たことがない彼女を心配して、デリーから彼女を迎えにも来てくれました。デリーへ向かう約束の当日、彼女は親にはもちろん内緒で、一人で待ち合わせ場所に急いでいました。と、その道すがらで、彼女の行動に不審を感じていた親に見つかってしまいました。「何処へ行くのだ」、「娘を売り飛ばす気か」と、彼女の村と仕事先を探した人の村、二つの村を巻き込んでの大騒ぎとなりました。

二つの村の村会議が出した結論は･･･私からしたら驚愕するようなものでした。そう、村会議は、双方の両親の思い、本人たちの意思に関わらず、この二人の結婚を命じたのです。こうして 16 歳の彼女は、私のうちを手伝ってくれていた 16 歳の少年の妻になりました(二人の年齢は定かではありません)。

これがインドの農村部に属する多く人々の人生なのでしょうか･･･。

その職種にもよるのでしょうが、多くの出稼ぎ者は、年に 1～2 ヶ月程しか村に戻れない。わずか 1～2 ヶ月しか家族と一緒には暮らせないのが彼らの現実です。

その夫を夫の家族と待つ暮らしが当たり前の村から、結婚後、わずか数ヶ月で、都会に暮らす夫のもとに彼女が来たのは、姑との折り合いの悪さが原因。その姑の不満の一つは、彼女が「ご飯」を捨てることにあったのです。一緒に暮らしだし、夫もすぐにそのことに気づきました。なけなしのお金で遣り繰りしているのに、何故、ご飯を捨てるのか。

なんと、彼女はお米を「測る」ことを知らなかった･･･。教えてから、彼女が解ってからは、もうご飯が捨てられることはないそうです。
「量る」「測る」「計る」･･･私達はどのようにしてこれらの「当たり前」を身につけてきたのでしょうか･･･。

私に文字(デーヴァナーガリー)を教えてくれ、と言った女性に、さぁ、始めましょう、と、筆記用具を渡すと･･･驚いたことに･･･30 歳の彼女はペンを棒を掴むように握りました。字が書けない、とは、こういうことなのか、と、私はまさに衝撃を受けました。
私は文字のない世界を想像することができません。彼女達の住んでいる世界はどんな世界なのでしょう･･･。

インドにはこんな話があります。
ある日、おじいさんがメガネ屋さんに行きました。店主は検眼を始め、下から順に字を指し示しつつ、ついに一番上の大きな字について尋ねました。が、おじいさんは首を振るばかりです。そのおじいさんは、メガネをかけたら字が読めるようになると思っていたのです。

〈↑ 神様に捧げる花籠〉
〈↓ 祭壇の花〉

さて、私が落ちた花を拾い集めていると、それに気がついた人が、落ちた花を神様に捧げたら駄目だよ、と声をかけてくれます。
早朝に、神様に捧げる花を摘んでいる人をよく見かけます。毎朝、お坊さんに来てもらっている家もありますし、家々に神様に捧げる花を届けるのも花屋さんの仕事です。
奇妙なことに、どこでも、茎なしの花頭だけが、祭壇に置かれ(飾られ)ます。
結婚式やお祭りの時など、家の壁面を花で飾り立て、通路などにも花を敷き詰めます。これらの花も全て花頭、あるいは花弁をバラバラにしたものです。花々を絵の具の一色として、一枚の絵を描くがごとく美しく飾りつけています。
神のそばに置かれた、花首から折り取られた花が新鮮で美しければ美しいほど無残に感じるのは、私たちが花を生ける･活ける習慣を持っているからでしょうか。
インドでは、何故、花を水に挿さないのでしょう･･･。聞くところによると、匂いを嗅いだ花は、神様に捧げることはできないそうですから、これもあるいは宗教的な意味があるのかもしれませんが･･･。
これらの花を目にする度に、私は、インド人の「諦念」を見る思いがするのです。切り取られた花は、もう生きても･活きることもないのだ、と言われているようで･･･私の自身の生への執着を見せつけられるような気分に襲われます。そして、インド人の生の潔さを羨んでいます･･･。

私が住んでいたのは四世帯が住む集合住宅でした。こうした住宅には、必ず、屋上などに其々の家の手伝いさん達が住む住居(本当に小さく 3～4 畳半くらい)が併設されています。彼らの住む家は別々ですが、バス･トイレは大概一箇所しかなく、共同です。彼らには、雇い主のそれを使用することが許されていません。
私が住んでいたそこには、奇妙なことに、その屋上の一軒に、どの家にも属さない三世代、五人家族がいました。何時からかは分りませんが、彼らは徐々にその数を増やしつつ、そこに住んでいるとのことでした。
ある日、うちの手伝い君が「あの家の子が病気で、昼間に政府の病院(殆ど薬代だけで診てくれる)に行ったのだけど、熱が上がるばかりで、すごく具合が悪そうだから、少しいい病院に行った方がいいと思うのだけど、一緒に行ってくれる?」と訊きてきました。19 時を少し回る頃でしたでしょうか。財布を握り締め、近くの彼らが言うところの少しいい病院へ一緒に行きました。診て頂くと即、入院、との診断。健康保険制度のないインドでは、私立病院への入院の際、保証金を置かなくてはなりません。が、私の読み違えで、用意して行った金額では、請求額に足りませんでした。取り敢えず、有り金を置き、残りは、後日、必ず「私」が責任をもって支払から、と、その子を入院させもらい、帰宅しました。
翌日、「あの子は?」と、手伝い君に訊くと･･･今朝、あの子のおじいさんが、上の二階と三階の家に行き、

事情を話し、其々の家から、あの子の治療代を出して貰ったから、もうお金の心配はない、とのこと。
　これを聞き、私は、なる程！と膝を打ちたいような気分になりました。インドと言えば「カースト」が対で出てくるほどであるし、都会のデリーでの生活でさえ、その影を感じることがあるが、その社会に則した知恵も又ある、と言うことでしょうか。
　ここインドでは、同情や優越感からばかりではなく、出来る人が出来るだけのことをする責任を其々が負っているような気がします･･･。

　この 20 年で･･･
　かつては、インド女性は世界中のどこにいてもサリーを着ている、と言われたそうだが、最近、殊にデリー辺りでは、サリーやサルワール･カミーズなどの伝統的衣装は姿を消しつつあり、若い女性のジーンズ、ミニスカート姿が当たり前になってきています。
　殺生を忌み、「革」製品を身に付けることを嫌がっていた人々も、最近は、争うように靴やバックにお金をかけるようになってきました。
　太った人が富の象徴だったのは何時頃くらいまでだっただろう。今は男女ともにスリムな体型を求め、その為のスポーツジムが林立しています。
　その昔には「ベジタリアン」の厳密さ･潔癖さに度肝を抜かれたこともあったが、今はノンベジの私が彼らの隣に座ることも以前ほど気にかけていないように感じます。
　誰が作ったかわからない食事はしない、あるいは不衛生だから、と外食を否定していた人々からの世代交代からなのか、人々の懐が少し豊かになってきているからなのか、レストランがすごく増えてきています。又、インド料理店しかなかったデリーでも、色々な国々の料理が食べられるようになってきています。
　私の知人のおばさんインド人は、自分は生涯、手伝いさんと暮らせるだろうが、これからは･･･息子たちは、多分、手伝いさんの助けなしで暮らさなくてはならない時が来るのでは、と言っています。
　デリー、ことに南デリーでは、野良犬が少なくなってきています。野良犬を捕まえて殺すのではなく、去勢して、また元の場所に戻すプロジェクトが確実に効果をあげてきているのです。

　この先、インドはどのように変化していくのだろ･･･。
　あの喧騒を、混沌を懐かしく思うこの頃･･･です

筆者紹介　　渡会 法子（わたらい･のりこ）

1994 年	4 月	会社を辞めてインド･デリーに住み始める
1999 年	6 月	ヒンディ語の学校へ通い出す
2004 年	12 月	日本人向け民宿（サプナ）を始める
2014 年	11 月	サプナを閉めて帰国

4. インドニュース（2015 年 4 月）
News from India

Ⅰ．内政

4月15日

●各紙報道によれば、15日、旧ジャナタ党（注: インディラ･ガンディー率いるコングレス党に対抗して結成されたジャナタ党（1977年結成）及びジャナタ･ダル（1988年結成）。89～91年及び96～98年に成立した連立政権で首相を輩出するも、90年代初頭より党の分裂が頻発し、その後消滅）の流れを組む地域政党のうち、社会主義党（SP）、ジャナタ･ダル統一派（JD(U)）、民族ジャナタ･ダル（RJD）、ジャナタ･ダル世俗派（JD(S)）、インド民族ロック･ダル（INLD）、社会主義人民党（SJP）の6政党が合併し、新党を結成することを発表。新党党首には、ムラヤム･シン･ヤダブSP党首が就任。新党名は未発表であるが、これらの政党が旧ジャナ

タ党から派生した勢力であるため、国内メディアは、同党を「ジャナタ・パリヴァール(注: ジャナタ・ファミリーの意味)」と報道。同党は、連邦上院で30議席を有し、コングレス党(68議席)、BJP(47議席)に次いで第3党となる(連邦下院では15議席を有し、第8党)。

メモ:
今回の新党結成に参画した地域政党は、インド北部の大票田であるウッタル・プラデシュ(UP)州とビハール州で政権を有するほか、ハリヤナ州やカルナタカ州などにも基盤を有する。BJP及びコングレス党に次ぐ全国規模の政党が誕生したことになる。
反BJPを旗印として集結した「ジャナタ・パリヴァール」だが、その前身であるジャナタ党、ジャナタ・ダルの時代に、政権与党になりつつも党の分裂によって崩壊した経験があることから、今回の新党結成がいつまで維持されるのかにも注目が集まっている。
新党にとって目下の目標は、本年後半に行われる予定のビハール州議会選挙での勝利である。BJPは先般のデリー準州議会選挙で大敗を喫したことから、ビハール州議会選挙での挽回を目指して、マンジー前同州首相との連携を模索するなど活動を行っており、ビハール州を基盤とするJD(U)とRJDの合併・選挙協力を意味する今回の新党結成によって、BJPは同州議会選挙で厳しい戦いを強いられることが予想される(現在、ビハール州議会(全232議席)でJD(U)とRJDをあわせた議席数は134議席)。

4月20日

●予算国会の休会が開け、20日より後半の会期が開始された(下院は5月8日まで、上院は5月13日まで開会の予定)。

メモ:
土地収用法改正に関しては、3月31日にモディ内閣が大統領令を提出、3日にムカジー大統領が署名し、再公布されたが、会期中に連邦議会で改正法として審議・成立されるか否かが注目されている。また州毎に異なる税制度を統一するGST(Goods and Services Taxs)法案の審議も予定されている。

●各種報道によれば、庶民党(AAP)は、20日、同党の創設メンバーで全国幹部のヨゲンドラ・ヤダヴ、プラシャント・ブシャン、およびアナンド・クマール、アジット・ジャの4名を、反党活動や行動規範への違反を理由として党から除名したことを発表。

Ⅱ. 経済

4 月 29 日

●各種報道及び内閣官房発表によれば、29日、モディ内閣は、スマート・シティ構想に約1兆ルピーを今後5年間で投じていく旨を閣議決定した。

メモ:
同発表によれば、「スマート・シティ・ミッション」は、各州から候補地として挙げられた中からコンペによって 100 都市を選定し、近代的なインフラを整備する計画で、今後 5 年間に 4,800 億ルピーを投じることが決定された。各都市は、年 10 億ルピーの予算を配分される。
また、「活性化と都市変貌のためのアタル・ミッション(the Atal Mission for Rejuvenation and Urban Transformation: ＡＭＲＵＴ)」(注:「アタル」はヴァジパイ元首相(ＢＪＰ)の名前を取ったもの)は、人口10万人以上の500市町村を対象にして、基本インフラの整備を支援する計画で、今後5年間に5,000億ルピーを投じることが決定された。人口100万人未満の都市に対しては計画費用の50%を、100万人以上の都市に対しては計画費用の1/3を中央政府が支援する。このミッションは、コングレス党政権の看板政策の一つであった「ジャルハルラル・ネルー全国都市再生ミッション(ＪＮＮＵＲＭ)」(2014年3月終了)を引き継ぐもので、ＪＮＮＵＲＭが個別の計画内容を政府が精査する仕組みであったのに対して、ＡＭＲＵＴは計画を各州に任せ、その内容に柔軟性を持たせるシステムになっている。

Ⅲ. 外交

4 月 3 日

●同党発表によれば、3 日、インド人民党(BJP)は、ベンガルールで開催した全国幹部会議において、外交政策決議を採択した。

4 月 10 日－11 日

●各紙報道及び政府発表によれば、モディ首相は、10 日から 11 日までフランスを訪問した。

メモ:
印仏首脳会談において、インドは、仏製ラファール戦闘機36機の早期調達を表明した。また、原子力協力について、両首脳は、印Ｌ＆Ｔ社と仏アレバ社の間の協力に関するＭＯＵ署名を歓迎した。

4 月 12 日－14 日

●各紙報道及び政府発表によれば、モディ首相は、12 日から 14 日までドイツを訪問した。

メモ:
両首脳は、協力を進める10分野(製造、技術開発、都市開発、環境、鉄道、河川清掃、再生可能エネルギー、教育、言語、科学技術)に合意した。

4 月 12 日－15 日

●各紙報道等によれば、12日から15日、ビショップ豪外相が訪印し、14日、スワラージ外相との間で第10回印豪外相枠組対話を行った。双方は、ウラン流通促進のための原子力協力の手続き等につき協議した。ビショップ外相は、パリカル国防相、ジャイトリー財務相、シャルマ文化相、バラティ水資源相とも会談した。

4月15日－16日

●各紙報道及び政府発表によれば、モディ首相は、15 日から 16 日までカナダを訪問した。インド首相によるカナダ訪問は 42 年ぶり。

メモ:
両国は、二国間関係を戦略的パートナーシップに格上げした。カナダは、今後5年間で約3,200トン超の原子力発電用ウランをインドに供給することに合意した。

4 月 15 日－18 日

●各紙報道によれば、15日から18日、パリカル国防大臣は、韓国を訪問し、韓民求国防大臣、崔潤喜合同参謀本部議長、金寛鎮国家安全保障室長らと会談した。国防大臣会議では、防衛産業における両国の協力について集中的に協議された。

4月23日

●23日、インド外務省発表によれば、インド政府はASEAN代表部を開所した。ジャカルタでの同開所式においてスワラージ外相がスピーチを行った。

メモ:
スワラージ外相は、同スピーチの中で、同代表部の開所は、ＡＳＥＡＮとの関係強化への真摯なコミットメントを反映するもの、ＡＳＥＡＮはインドのアクト･イースト政策の核に位置し、アジアの世紀という我々の夢の中心である旨述べた。

4月26日－28日

●各紙報道によれば、26日から28日にかけて、マルガージョ･スペイン外務大臣が訪印し、モディ首相やスワラージ外相らと会談を行った。

4月27日－29日

●各紙報道によれば、27日から29日にかけて、ガーニ･アフガニスタン大統領が訪印し、ムカジー大統領やモディ首相らと会談を行った。

4 月 25 日－30 日

●各種報道によれば、25 日、ネパールを震源とする M7.8 の地震が発生した。インド国内でも、ネパールと国境を接する各州で被害が出た(27 日インド内務省発表によれば、死者は 72 名、負傷者は 296 名)。

●25 日、モディ首相は、ネパール大統領及び首相に被害に対応するためのあらゆる支援を約束し、また、閣僚級の対策会議を実施し、救助チーム及び医療チームの派遣を指示した。26 日、フォローアップ会合を開催し、空路に加えて陸路での被災地への食糧･水の供給、国家災害対応部隊の立ち上げと共に、被災者遺族に対して首相国家救援基金から 20 万ルピー、国家災害救援基金から 40 万ルピー、重篤な傷害に

対しては５万ルピーの補償金を発表。また、内務省は、ネパールからインドに入国する全ての観光客に対して無料でビザを発給する旨発表。モディ首相は、27 日には３度目の本件フォローアップ会議を開催した。

メモ：
28日付インド国防省発表によれば、25日から28日までにインド空軍は、輸送機Ｃ－17等による合計36回の空輸によって238トンの救援物資を輸送した。また、8機のヘリコプターをネパールでの救助活動のために派遣した。

Ⅳ．日印関係

４月６日

●外務省発表によれば、6日、インドのデリーにおいて日･インド次官級「2＋2」対話が開催された。

4月27日-5月1日

●経産省発表によれば、宮沢経済産業大臣は、27日から5月1日の日程で、25社の同行企業代表達とともに訪印し、モディ首相を表敬した他、シタラマン商工大臣等と会談した。

今月の注目点: モディ首相の経済外交

モディ首相は、5月10日から16日までの1週間、フランス、ドイツ、カナダの3カ国を訪問した。G7の産業国である同三カ国の訪問には如何なる成果があったのか。

インドは、以前より、次期中型多目的戦闘機126機を調達する計画を進めており、2012年に仏製ラファール戦闘機を機種として選定したものの、契約額、技術移転等の各種の調達条件を巡って印仏間の交渉は難航していた。インドは、これまでの交渉では、126機中、18機を直接輸入し、残り108機をインド国内で製造するという方針であったとされる。ところが今回、モディ首相が36機(契約額は約5,000億円)を直接輸入する方針を発表したことは、驚きとともに各紙でも大きく報じられた。これにより、防衛力強化を迅速に進めることが可能となった。輸入機数を増やしたことは、一見、メイク･イン･インディアの方針と矛盾するようにも見えるが、難航していた交渉全体を前に進めることに繋がるため、残りのインド国内製造分の交渉も円滑化され、メイク･イン･インディアに結果的に資すると見ることもできよう。今回の決定はモディ首相の政治的決断によるものであろうと報じられている。

また、モディ首相は、フランスではエアバス社の工場を訪問し、ドイツではハノーバー国際見本市への参加やシーメンス社研究所の訪問、カナダではビジネス界との会合を行う等、製造産業のインドへの誘致、投資の働きかけに力を入れている様子が窺える。フランスとカナダでは、原子力協力についても進めていくことで合意された。

ＢＪＰは、3日に開催した全国幹部会議において外交政策決議を採択した。その中で、モディ首相は、国家の経済開発の加速というインド政府の主要な目標と調和した大胆、積極的且つ革新的な外交政策を追求したと評価した。モディ首相自らのトップ経済外交とその成果重視の姿勢に期待が集まる。

5. イベント紹介
Japan-India Events

=◇ 今後のイベント ◇=

◆インド祭り『インド政府 ICCR 派遣“南インド古典音楽講演”』

インド政府が菩提僊那継承事業(2015/5/18 東大寺中門にて開催)での奉納公演に派遣する南インド古典音楽の東京公演を開催します。この機会に、インドの文化･芸術に触れて下さい。

☆日　時: 2015 年 5 月 22 日(金)　　19:00　開演(18:30 開場)

会　場: インド大使館ヴィヴェーカナンダ文化センターホール　　東京都千代田区九段南 2-2-11
(大型のバッグ、カメラ、録画機能のついた機械、飲食物の持ち込みはご遠慮下さい)
(13 歳未満のお子様のご来場はご遠慮下さい)

☆日　時: 2015 年 5 月 23 日(土)　　19:00　開演(18:30 開場)

会　場: スペース・オルタ　神奈川県横浜市港北区新横浜 2-8-4 オルタナティブ生活館 B1
JR 新横浜駅 徒歩 6 分

※5 月 22 日(金)、23 日(土)のイベント共に、入場料、主催・予約・問合先は下記のとおりです

入場料: (全席自由席) 当日-2,500 円 / 前売-2,000 円 / 学生は当日・前売共に 500 円割引

主　催・予約・問合先: NPO 法人日印交流を盛り上げる会　新潟県十日町市西甲 265　ミティラー美術館内
TEL　025-752-2396　　E-mail　ticket@mithila-museum.com

◆交流会開催のお知らせ◆

6 月 5 日(金)に、恒例の交流会を、三角顧問の受賞記念も兼ねて開催致します。参加ご希望の方は、5 月 27 月(水)迄に、同封の申込用紙に必要事項をご記入の上、FAX もしくはメールで、お申込下さい。

日　時: 2015 年 6 月 5 日(金) 18:00～

会　場: インド料理レストラン "マハラジャ 丸の内店"
東京メトロ千代田線「二重橋前」駅 3 番出口 1 分　　明治安田生命ビル 地下 2 階

参加費: 一般　4,000 円 / 学生　2,000 円　　(参加費は事前にお振込み下さい)

定　員: 60 名(先着順)

〆　切: 5 月 27 日(水) 申込み並びに振込み期限

6. 新刊書紹介
Books Review

§『中村元の仏教入門』

著者: 中村 元

発行: 春秋社

定価: 1,600 円+税　　ISBN 978-4-393-13581-5　C0015

中村元先生が始められた東方学院での「仏教入門」講義を録音し、活字に起こしたものです。仏教について初めて学ぼうとする者が手にする 1 冊に、最もふさわしい書と言えます。中村先生によって平易な言葉で語られる本書は、仏教思想への 1 歩を示すと同時に、その奥深い世界を見せてくれます。

7. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は2015年6月12日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

〈事務局からのお願い〉

個人会員の皆様には、4月1日付で、「個人会員年会費納入のお願い」をお送りしております。皆様には、引き続きのご支援を賜りたく、まだ手続きがお済でない方は、お早目の納入をお願い申し上げます。

なお、会員証は、入会初年度以外は希望者のみに発行しております。ご希望の方は、事務局までお申し付けください。

また、転居等による住所変更や、メール･FAX･電話等の変更につきましても、速やかに変更内容を事務局までお知らせください。事務局連絡先は、下段をご参照下さい。

〈編集後記〉

4月25日、ネパールでマグニチュード7.8の地震がおき、モディ首相は、すぐさまネパールへの救援隊の派遣を指示したとニュースでも伝えられています。

倒壊した建物の下敷きになって亡くなるなど、被害はインドにも及んでいます。

1日にも早い復興と、亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

(記 渡邊恭子)

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の3名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費：個人	8,000円/口	☆入会金	個人 2,000円
学生	4,000円/口		学生 1,000円
一般法人会員	100,000円/口		法人 5,000円
特別法人会員	150,000円/口		(一般法人、特別法人会員共に)

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解･ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

月刊インド Vol.112 No.4 (2015年5月15日発行) 発行者 平林 博 編集者 笹田 勝義
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: http://www.japan-india.com/